

イスラエルにおけるアラブ人社会の多元性・多層性を描き出す

菅瀬晶子 総合研究大学院大学葉山高等研究センター上級研究員



菅瀬晶子 (すがせ・あきこ)
地域文化学専攻。「イスラエルにおけるアラブ人キリスト教徒のアイデンティティの形態—ガリラヤ地方・メルキト派カトリック信徒の事例研究—」で、2006年3月に長倉研究奨励賞を受ける。

ユダヤ人国家のイスラエルには、北部のガリラヤ地方を中心に多数のアラブ人社会が存在する。その中のメルキト派カトリック信徒*1については、これまでほとんど研究されてこなかった。菅瀬晶子さんは、同信徒のアイデンティティ構造の多層性を歴史学および人類学的な文脈で明らかにし、「マイノリティ」とひとことできられがちなイスラエルのアラブ人社会を多元的に捉え直した。

——このテーマを選んだ理由は？

菅瀬 もともとイスラエルやパレスチナに興味があり、子どもの頃は『聖書物語』をよく読んでいました。高校のとき『アラビアのロレンス』を読み、ビデオも観ました。ちょうどインティファダ（イスラエル軍に対するパレスチナ人の抵抗運動）が起こっていたときで、現実と物語の場所とが結びつきました。

アラビア語を勉強したくて東京外語大学に進み、パレスチナ問題に詳しい藤田進教授のゼミをとりました。メルキト派カトリックの司祭（エリヤス・シャクール司祭）の自叙伝を読み、キリスト教徒でありながらアラブ人であるということに興味を持ち、イエスの時代に（イエスの出身地である）ガリラヤ地方で差別を受けていた人びとの存在について卒論で取り上げました。そして修士では、「緑の男」というイスラームとキリスト教に共通の聖者のことを書き

ました。この人物については、パレスチナ問題を解く鍵になるかもしれないともっと調べたかったのですが、資料があまりにもないので、深く研究することはできませんでした。

——調査はどのように行ったのですか。また、もっとも苦労した点は？

菅瀬 調査はハイファという町とメルキト派信徒のみで構成するF村で行ったのですが、F村の村長さんがシンポジウム参加のため来日した際、お手伝いをしたのがきっかけで、村での調査を了承してくれました。最初は村長さんのところに、その後、一人暮らしのおばあさんのところに滞在していました。すべてが楽しかったのですが、一番困ったのは、村では親族関係に基づく派閥があり、対立する家族のところへ自由に行けなかったことです。

——通訳を介さず、すべて自分で聞き取りをしたのですか。

菅瀬 はい。アラビア語は問題なかったのですが、F村はイスラエルにあるので、ヘブライ語が混じったアラビア語を使っていました。それで、ハイファ大学でヘブライ語の勉強をしました。微妙な方言の違いから出身地はどこかといったこともわかるようになりました。

フィールドワークをする際、「情報を取る機械になるな」と先輩からいわれました。同じ人間として対等な立場にな

らないと見えてこないことがあります。話すのを嫌がることはそこでとどめておいて、自然の流れに任せるようにしました。できるだけ行動を共にしていると、向こうから話してくれるものです。

——女性であるということはハンディにならなかったのですか？

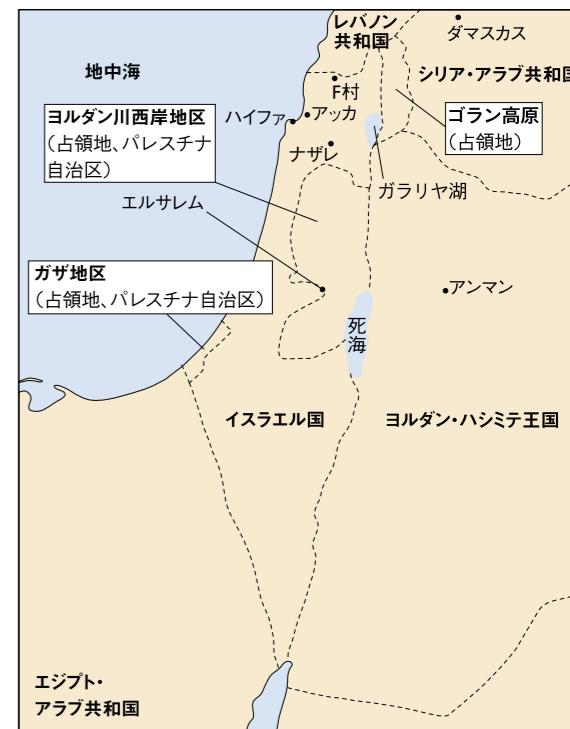
菅瀬 いえ、逆に女性のほうが有利だと思いました。食事の用意をする女性たちの手伝いをしながら話を聞くことができましたし、食事中は男性たちが呼んでくれました。おかげで料理もたくさん覚えました。イスラエル・パレスチナの政治の話だけでなく、衣食住の紹介もしていきたいと思います。

——今後の研究について教えてください。

菅瀬 メルキト派はディアスポラ*2の人たちで、親族のつながりを重要視します。イスラエルから離れた人たちと、留まり続けた人たちの中で、メルキト派であるという意識がどう違うのか調べたいと思います。シリアやレバノンにいるメルキト派信徒の比較研究もしたいのですが、私のパスポートにはイスラエルのスタンプがあるので、たぶん入国するのは難しいでしょう。また、イスラエル国内の他のアラブ人についても研究したいと考えています。

私が目指しているのは、イスラエル・パレスチナというのは紛争だけの土地ではないということとを日本で広めることです。食文化もそうですし、いろいろな信徒の人たちがいて、多様性を受け入れる土壌というのは、日本でも今後さらに必要とされるのではないのでしょうか。

(取材・構成：村上朝子)



*1 「メルキト派カトリック」は18世紀にオスマン帝国治下のシリアで誕生した、カトリックとギリシア正教の複合宗派で、ローマ・カトリック傘下に属しながら、独自の教会組織をもつ。
*2 「ディアスポラ」とは、紛争や迫害などのため、もとい土地を離れて暮らし、その土地に今なお帰属意識を抱き続ける人々を意味する。

日常的な心理現象を脳科学的な見地から解明

野口泰基 自然科学研究機構生理学研究所

刺激の乏しい日常の繰り返しはあっという間に過ぎるといった感覚は、誰もが経験していることだろう。また、一度見たことのある物は、他の物よりも速く目に飛び込んでくるというも、当たり前のことと思われている。では、そのような現象は脳科学的な見地からきちんと説明ができるのだろうか。

野口さんは、脳内の神経活動の時間的変化を高度な分解能で観察できる脳磁図を用い、日常的な心理現象である「既視感」と「時間感覚」について、神経学的に説明することに成功した。このようなテーマに対してはこれまで、脳血流計測手法などが採用されてきたが、時間分解能に制限が

かかるため、ミリ秒単位で流れる脳内の電気信号をリアルタイムで追うことは困難だった。高い時間分解能を持つ脳磁図を用いることで、この脳内の神経活動の状況を解明した。今後も「時間」をキーワードに、サブリミナル効果（知覚できない程度の速さや音量の映像や音声を挿入し、潜在意識に刺激を与えることで表れるとされる効果）など、さまざまな心理現象の根底にある脳内メカニズムを解明していきたいと野口さんは話す。

そうすることで、「『意思』とか『意識』とか、もっとも人間らしいはずのものを物質的な見地から説明できる可能性が見えてきます」。文系出身の野口さんの優れた着想力や創造力に多くの期待が集まっている。



野口泰基 (のぐち・やすき)
生理学専攻。「"時間"に関わるさまざまな心理的現象の脳内メカニズムの解明」で、2006年3月に総研大研究奨励賞を受ける。

◆長倉研究奨励賞と総合研究大学院大学研究奨励賞◆
総研大生の優秀な研究に対して、各専攻長が長倉研究奨励賞選考委員会に推薦。委員会の審議によって、「長倉研究奨励賞」受賞論文が選ばれる。また、受賞候補の中から優れた研究に「総合研究大学院大学研究奨励賞」が贈られる。

放射光X線を利用し、関節軟骨の精密描写に成功

島雄大介 茨城県立医療大学

手指に発症した関節リウマチが進行すると関節破壊が起こり、日常生活がきわめて困難になる。残念ながら、X線吸収差を利用した従来のレントゲン撮影では骨構造のみの描写となり、早期に異常を来した関節軟骨は描写されない。医療大を卒業後、診療放射線技師として臨床の現場にいた島雄さんは、「X線の新たな利用法、すなわちX線の屈折をコントラストとする画像法を臨床に応用し、関節軟骨の微細な異常に基づく関節リウマチの早期診断を可能として、これに苦しむ患者を少しでも減らしたい」と、この研究を始めたという。

島雄さんは、放射光X線を利用して屈折X線のみを抽出

する「X線暗視野法」の開発を始めたばかりの研究室の扉を叩き、関節軟骨描写の重要性を説き、この手法を積極的に応用。関節軟骨を臨床に近い条件下で精密描写することに成功し、2005年には応用物理学会賞を受賞。高エネルギーX線の利用によって臨床応用の際の被曝線量も問題ないという。島雄さんは、高エネルギーX線の制御と微小角の屈折X線の検出を両立する結晶光学系をデザインし、より高いコントラストを実現。最も苦労した部分だ。今後は、臨床応用に向けての課題である読影法の確立、つまり、画像コントラスト形成のメカニズムを定量的に解析できるよう研究を進めたいという。また、乳がんなど他の疾患への応用も考えていきたいと意欲をみせる。

島雄さんの研究は豊かなQOLを保障する上で大いに期待が高まっている。

(取材・構成：村上朝子)



島雄大介 (しまお・だいすけ)
物質構造科学専攻。「放射光によるX線暗視野法の関節リウマチ早期画像診断への応用」で、2006年3月に総研大研究奨励賞を受ける。